

詩経 国風 目次

詩経には、古来、いろいろな解釈があるようですが、私は、難しいことは別にして、「詩を素直に読んで浮かんだイメージを大事にする」ことを目標にして訳しています。

「**關雎**」**關雎鳩 在河之洲** 周南A〇〇一
 「長短乱れて茂ったアサザ 右に左に摘まみとる」男女が親しくなつていく様子を、菜摘みをしながらかう歌う詩です。

「**桃夭**」**桃之夭夭 灼灼其華** 周南A〇〇六
 「この桃いきいき美しい」若い娘をめたい桃の木に例え、ほめそやします。

「**兔置**」**肅肅兔置 椽之丁丁** 周南A〇〇七
 「ぴんと張ったぞ兔網」兔網がうまく張れたというだけで、得意満面、純真素朴な田舎の青年の様子が目に浮かびます。

「**草蟲**」**嘒嘒草蟲 趯趯阜螽** 召南A〇一四
 貴方に会えないときの寂しさ、悲しさ、会えれば、もうそれだけでうれしい。

「**式微**」**式微式微 胡不歸** 邶風A〇三六
 「ああ！あなたに会ったりしなければ・・・、あなたと一緒にいなかったら・・・」男と駆け落ちしたものの、苦しい逃避行に耐えかねてもらす女の恨みごと

1

3

5

7

9

「**考槃**」**考槃在澗 碩人之寬** 衛風A〇五六
 「谷のほとりでいいことしたの」若い女性が逢引のときを思い出して詩っています。

「**鷄鳴**」**鷄既鳴矣 朝既盈矣** 齊風A〇九六
 「さつき鷄鳴いてたわ。ねえ、もう、お勤めにかなきやね」新婚早々の若い男女の気持ちがち伝わってくるような。

「**葛生**」**葛生蒙楚 藋蔓于野** 唐風A一二四
 「夏のながい日 冬ながい夜 いつかきつとあなたのもとに」今は亡き愛する人を悼む、私の一番好きな詩です。詩経の中でも最も美しい詩のひとつだと思います。

「**月出**」**月出皎兮 佼人僚兮** 陳風A一四三
 「月は白く澄みわたり」月の光の下でゆつたりと舞っている美しい人。まるで歌舞伎の舞台を見るような美しい光景です。

「**蟋蟀**」**蟋蟀之羽 衣裳楚楚** 曹風A一五〇
 「薄絹きよらか蟋蟀(かげろう)の羽(はね)蟋蟀の羽のように美しく、しかし、はかなかったあの人。部屋にかけたかたみの衣装に亡き人への思いがつのります。

国風の詩には、万葉集にも似た素朴な感情が溢れているように思います。

11

13

15

17

19

A-001「關雎」(關關たる雎鳩は河之洲に在り) 『詩經』国風 周南

「ミサゴが鳴いている」

AKY訳

ミサゴがツガイで鳴いている

河の中州にたたずんで

あの娘あでやか、花嫁候補

長短乱れて茂ったアサザ

右に左に揺れている

あの娘あでやか、お嫁に欲しい

願い叶わず 若者悩む

寝ても覚めても悩みはつきぬ

悩み悩んで 寝返りばかり

(……………)

長短乱れて茂ったアサザ

右に左につまみとる

あでやかあの娘と 和す琴と瑟(こと)

長短乱れて茂ったアサザ

右に左にむしりとる

あでやかあの娘と 打つ鐘鼓(かねたいこ)

(原詩)

(読み下し文)

關關雎鳩

在河之洲

窈窕淑女

君子好逑

參差荇菜

左右流之

窈窕淑女

寤寐求之

求之不得

寤寐思服

悠哉悠哉

輾轉反側

參差荇菜

左右采之

窈窕淑女

琴瑟友之

參差荇菜

左右芼之

窈窕淑女

鍾鼓樂之

關關(かんかん)たる雎鳩(しよきゆう)は

河之洲(かわのす)に在り

窈窕(ようちよう)たる淑女は

君子の好逑(こうきゆう)

參差(しんし)たる荇菜(こうさい)は

左右に之をとる

窈窕たる淑女は

寤寐に之を求む

之を求めて得ざれば

寤寐(ごび)に思服す

悠なるかな悠なるかな

輾轉(てんてん)反側す

參差たる荇菜は

左右に之をとる

窈窕たる淑女は

琴瑟(きんしつ)之を友(した)しむ

參差たる荇菜は

左右に之を芼(えら)ぶ

窈窕たる淑女は

鍾鼓(しょうこ)之を樂しむ

この詩は、菜摘み歌で、大勢の人(おそらく女性)が、一緒に或いは、掛け合いのように歌って、リズムを合わせて菜を摘んだのだと思います。

男女が親しくなっていく様子を歌ったフレーズが主題で、アサザを取るフレーズと掛け合いになっています。

前半の第一節と第三節は、後半の第四節、第五節と以降と形式・内容が少し違います。雉鳩という鳥がつかいで川の洲にいるところから、若者がつかいを求め悩んでいる様子を表わしています。後半では、願いがかなって仲睦まじくなっているようです。

そして形式の違う前半の中にあつて後半の各節と形式の似た第二節が前後をつないでいます。

ただ、この詩では、思い悩んでいるときと、願いがかなつてからが、やや唐突な感じもあります。私の訳では、時間の経過を示す意味で前後の間に「(････････････)」を入れてみました。カラオケなら、「長めの間奏」というところでしょうか。

「使われている言葉について」

- 關關(かんかん)、鳥の鳴く声の擬声語、比較的穏やかな鳥の鳴き声。

● 雉鳩(しよきゆう)、通常ミサゴと訳されている。しかし、白川静さんは、ミサゴは、海岸に住んでいて内陸には見られないとし、また、猛禽類であつて、窈窕たる淑女とは、結びつきにくいとして、「みやこどり」のような川鳥であろうといっている。一方、内陸でも、大きな河や湖沼に住むとするものもあり、猛禽類とはいえ、胴、足、羽の裏は白く、長い羽を広げて空を飛ぶ姿は、優美でもある。夫婦仲がよく、夫婦共同で巢を作つたり、卵を温めたりもするという。この辺は、「君子の好逮」にふさわしいかもしれない。「ちつちつ」とか、「びよびよ」と鳴くというが、「關關」という表現がそれにふさわしいかどうか、私には、わからない。

● 窈窕(ようちよう)、あでやかで美しい。艶めかしい意味を含んでいる(白川静、平凡社「字統」)。

● 君子の好逮(こうきゆう)、立派な男のよい配偶者。

● 參差(しんし)、長短ふぞろいの状態。

● 寤寐(ごび)、ゆめうつつ。寤は、覚める。寐は、寝る。

● 思服(しふく)、思う。心にとどめる。

● 悠(ゆう)、憂い思う。心配する。

● 苜蓿(こうさい)、日本名「アサザ」、ハナジユンサイともいう。アサザ属ミツガシワ科。日本・朝鮮・中国(全土)をはじめ、ユーラシアの温帯に広く分布する。漢方では、全草を苜蓿と呼び、薬用にす

る。また食用にもなる。米を加えて煮たおじや(糝)は、江南の名菜。水辺で採る蔬菜としては高級品とされている(嶋田英誠編「跡見群芳譜」巻五野草譜より)。

● 琴瑟(きんじつ)、琴は、五弦或は七弦、瑟は二十五弦の弦楽器。因みに日本の十三弦琴は箏という。

● 流、流れる、行く、仲間などの意だが、白川静さんは、摻が本字であろうという(詩経「国風」)。摻(びよう)は、求む、摘み取るの意。しかし、私は、流れの中で左右に揺れてなかなか摘めない、求めて得られない様として流をとった。

● 采(さい)は、(木の実などを)もぎ取る、● 芼(もう)は、草を抜き取る。流、采、芼と「寤寐求之」、「琴瑟友之」、「鍾鼓樂之」への変化で、想い求めた配偶者を得て、仲睦まじくなる様を表している。

A-006「桃夭」(桃これ夭夭たる) 『詩経』国風 周南

「この娘(こ)いきいき若い桃」

(原詩)

(読み下し文)

AKY訳

この桃 いくいき 美しい

桃之夭夭

桃之(こ)これ夭夭(ようよう)たる

花はさかりと 咲きほころ

灼灼其華

灼灼(しゃくしゃく)たる其の華(はな)

この娘(こ)がうちに 嫁に 来りや

之子于歸

之(こ)の子于(こ)こに歸(と)つがば

いいおくさんになるだろう

宜其室家

其(そ)の室家(しつか)に宜(よろ)しからん

この桃 いくいき 美しい

桃之夭夭

桃之れ夭夭たる

実がまるまると 熟してる

黃有其實

黃(ふん)たる其の實(み)有り

この娘がうちに 嫁に 来りや

之子于歸

之の子于に歸がば

いいかあさんになるだろう

宜其家室

其の家室(かじつ)に宜(よろ)しからん

この桃 いくいき 美しい

桃之夭夭

桃之れ夭夭たる

葉もふよふよと 繁ってる

其葉蓁蓁

其の葉蓁蓁(しんしん)たり

この娘がうちに 嫁に 来りや

之子于歸

之の子于に歸がば

みなしあわせになるだろう。

宜其家人

其の家人(かじん)に宜(よろ)しからん

「ほら、あの子見てごらん。若いっていいねえ。桃の花みたいだ。輝いているよ。」

「すっかり大人だよ。膨らむところは膨らんで、きつと、繁るところも、しつかり繁っているよ。素直だし、きつといい嫁さんになるよ。」

娘の成長をうわさし、よろこんでいます。めでたい桃の木に例えているところから、結婚式などで歌われたものかも知れません。「桃之夭夭」「之子于歸」とそれに続く句がそれぞれ一組となつて繰り返されているので、宴席などで、掛け合いのように交互に歌ったとしたら楽しいと思います。

駒田信二さんは、咲いた桃の花、膨らんだ桃の実、繁った桃の葉をそれぞれ成熟した女性の肉体に例えて、若い娘を囁かしたてる健康なエロティックな歌だといっています(駒田信二「漢詩名句はなしの話」)。これも楽しい話です。

明るく、楽しく、しかも美しさを持った、とてもいい詩だと思います。

「使われている言葉について」

● 「周南」は、周の初め周公旦が封じられた河南西部の地域で詠まれていた詩を集めたもの。

● 桃は、日本名「モモ」バラ科。中国の黄河上流地方、陝西・甘肅にまたがる高原地帯の原産。野生型の果実は直径3cm程度。早くから食用品種が作られた。黄肉のモモとネクタリンは、六〇七世紀にトルキスタンで作られ、七世紀には中国で栽培されていた。中国において桃は仙木・仙果(神仙に力を与える樹木・果実の意)と呼ばれ、邪気を祓い不老長寿を与える植物として親しまれている。桃で作られた弓矢を射ることは悪鬼除けの、桃の枝を畑に挿すことは虫除けのまじないとなる。桃の実は長寿を示す吉祥図案であり、祝い事の際には桃の実をかたどった練り餡入りの饅頭菓子・壽桃(シヨウタオ、shoutao)を食べる習慣がある(嶋田英誠編「跡見群芳譜」巻五 野草譜より)。

● 夭夭、若々しく美しい。夭は、しなやかに身をくねらせる形。そこから少壮の意に用いる。

● 灼灼、美しい様子。花が盛んに咲いている様子。光が輝くようす。宜、具合よい。ほどよい。

● 室家、家庭、家族、夫婦。家室、室家は、韻のために読み替えたもの。

● 實、実がまるまると膨らむ様子。中から力が満ち溢れる様。

● 蓁蓁、葉の繁る様。

詩経には、ほかにも日本の万葉集その他の古歌と同様のおおらかで素朴な歌が沢山あります。これらは、やはり、楽しく調子よく訳したいと思います。

A-007「兔置」(肅肅たる兔置)『詩経』国風 周南

「うさぎ網」

AKY訳

(原詩)

(読み下し文)

ぴんと張ったぞうさぎ網

肅肅兔置

肅肅(しゆくしゆく)たる兔置(としや)

とんととんと杭(くい)うって

椽之丁丁

之を椽(たく)すること丁丁たり

力溢れる我輩は

赳赳武夫

赳赳(きゆうきゆう)たる武夫(もののは)

我が殿様のよき家来

公侯干城

公侯の干城(かんじょう)

ぴんと張ったぞうさぎ網

肅肅兔置

肅肅たる兔置

選びに選んだうさぎ道

施于中逵

中逵(ちゆうきに)施(いた)る

知恵が溢れる我輩は

赳赳武夫

赳赳たる武夫は

我が殿様のよき参謀

公侯好仇

公侯の好仇(こうきゆう)

ぴんと張ったぞうさぎ網

肅肅兔置

肅肅たる兔置

林の奥まで分け入って

施于中林

中林(ちゆうりん)に施(いた)る

勇氣溢れる我輩は

赳赳武夫

赳赳たる武夫は

我が殿様のよき相棒

公侯腹心

公侯の腹心

「うさぎ網つていうやつあ、風が吹いたつてガサゴソ音がしない様にぴーんと張らなきゃだめなんだ。音がしたらうさぎが網に気がついちまう。おいらみたいに力のあるものじゃなきゃできないこつた。」

仕掛けるにやあ、うさぎの通り道を選ばなきゃね。うさぎがこないところに仕掛けたつてだめだ。おいらみたいに知恵の回るもんだからできるんだ。

それも林の奥のほうまで入っていつて仕掛けなきゃならない。そうじゃなきゃうさぎなんかいるもんか。おいらみたいに勇気のあるもんじゃなきゃ、そんなところまで一人でいくこたあできっこない。

どうだ、おいらあ、いい家来だろう？ お殿様あきつと褒めてくれるぞ。お前は、家来以上だ。参謀だ。いい仲間だつてな。」

うさぎとりの網がうまく張れたというだけで、すっかりいい気持ちになつている、胸を張つて大手を振つて。まるで勝ち名乗りを受けて、意気揚々と花道を引き上げてくる高見盛みたい。あるいは、NHKの人形アニメにも出てきそうな、たとえば「ひよこりひよたん島」の海賊船長のような。

威張つては、いるけれど、どこかかわいい、純真素朴な田舎の青年の様子が目に浮かんでくるようです。

「使われている言葉について」

- 肅肅(しゅくしゅく)、静に音をたてず。丁々と音をたてて杭を打つているのだから、音をたてないというのは、網を張るときではなく、張つたあと、風などで、がさごそ音をたてないようというのだろう。それゆえ、「びんと張る」と訳した。
- 免置(としや)、置は、「しよ」とも読む。網のこと。
- 椽(たく)、打つ、網を張るための杭を打つ。
- 丁丁、杭を打つ音。擬声語。
- 赳赳(きゅうきゅう)、強く勇ましい、猛々しい。
- 干城(かんじょう)、堅く守る。また、その人。武人。干は、盾。
- 施(いたる)、施は、旗のなびく様(白川静、字統)。ここでは、網を張り至るの意(白川静、「詩経国風」東洋文庫)。

• 中逵(ちゅうき)、逵は、みち。分かれ道。兔網なので、うさぎの通る道のことと解した。

• 好仇(こうきゅう)、よき仲間。仇は、対等の相手をいい、怨仇ではない(白川静、「詩経国風」東洋文庫)。

• 中林(ちゅうりん)、林の中。林中、韻のため倒語としている。

• 腹心、股肱の臣、もつとも肝要な人物。

この詩にも種々の解釈があります。諸侯やその妻達が優れていれば、世の中に徳が広まるとか、優れた人が集まってくる。あるいは、うさぎ取りを生業にする野人でも立派に役立つという詩だなどとする説もあり、鄭玄や朱子などの注釈でそうなつているのだそうですが、そのような解釈の根拠が示されていないので、私には、なんともわかりません。詩に書かれている言葉だけからイメージして上の詩になりました。

A-014「草蟲」(嘒嘒(ようよう)たる草蟲)『詩經』国風 召南

「あなたを見れば」

AKY訳

つれあい 追いかけて バッタが跳ねる

あなたに会えずに 私は悩む

あなたに会って あなたを見れば

悩みも消し 飛ぶ私の心

南山登って ワラビをとる間も

あなたに会えずに 不安な私

あなたに会って あなたを見れば

たちまち安らぐ 私の心

南山登って マメの芽摘む間も

あなたに会えずに 悲しい私

あなたに会って あなたを見れば

うれしそうに 私の心

(原詩)

(読み下し文)

嘒嘒草蟲
趨趨阜螽
未見君子
憂心忡忡
亦既見止
亦既覯止
我心則降

嘒嘒(ようよう)たる草蟲(くさむし)
趨趨(てきてきて)たる阜螽(ふしゅう)
未だ君子を見ざれば
憂心忡忡(ちゅううちゅう)たり
亦既に見
亦既に覯(あ)い
我が心則ち降る

陟彼南山
言采其蕨
未見君子
憂心惓惓
亦既見止
亦既覯止
我心則說

彼の南山に陟(のぼり)て
言(こと)に其の蕨(わらび)を采(と)る
未だ君子を見ざれば
憂心惓惓(てつ)たり
亦既に見
亦既に覯
我が心則ち說(よろこ)ぶ

陟彼南山
言采其薇
未見君子
我心傷悲
亦既見止
亦既覯止
我心則夷

彼の南山に陟りて
言に其の薇を采る
未だ君子を見ざれば
我が心傷悲す
亦既に見
亦既に覯
我が心則ち夷(たいら)ぐ

「草蟲が二匹キイキイ鳴きあっているわ。あれ、今度はバツタがツガイで跳ねた。虫たちにだつて連れ合いがいるのに、私は、あの人に会うことができない。」

山にワラビやマメの芽を取りに行つても、私は上の空、心はあの人のことです。さびしくて、さびしくて。

でも、あの人が見つめてきて会うことができれば、悩みも何にもない。うれしくて、うれしくて。」

第一句は、虫が相手を追うさま、第二句、第三句は、草つみを通じて、思う人に会う喜びを歌っています。

摘んだ菜を道の脇に置くと、無事に帰つてくるといふ言い伝えがあつて、菜摘み、草摘みは、遠くに出かけている人の無事を祈る意味があるのだそうです。

「使われている言葉について」

- 嚶嚶(ようよう)、擬声語、虫の鳴く声。
- 草蟲、イナゴの類、つゆむし、くさむし。
- 趨趨、踊るように飛び跳ねるさま。
- 阜蝻、いなご、ぼった、はたはた。
- 仲仲、憂えるさま。
- 惓惓、憂えるさま。心が定まらないさま。
- 見、見る、会う
- 觀(あ)、人と会う
- 止、語調を整える語
- 降、落ち着く。
- 南山、召南の地の南の山、洛水に沿つて
- 嶠山、熊耳山など。
- 薇、マメの芽(注)
- 説、悦と同じ。よろこぶ。
- 夷、やすらぐ、よろこぶ。

(注)

薇について、この薇がどんな植物であつたのかについて、旧説では、ゼンマイ(ワラビ)としていたが、最近では、ノエンドウの仲間とする説も有力。ノエンドウについて、嶋田英誠さんによれば、「野豌豆属の葉と茎は、味が今日のとうみよう(豆苗・豌豆苗)によく似て、古代には著名な蔬菜であつた。生食も可能であり、またスープの具にもされた。蘇軾が詩に詠った元脩菜がこれであり、巢元脩が嗜んだのでこの名がある。同じ理由で一名を巢菜といい、今日の野豌豆属の一部の漢名に、それが遺っている。明代には、官により栽培されて、宗廟の祭祀に用いられた。若芽を蔬菜とするほか、種子を炒め物にして食い、また花を鑑賞するために栽培することあつた。」という。(跡見群芳譜)。私もノエンドウ説を採用して、ここに、マメの芽と訳した。

A-036「式微」(微なり微なり胡(なん)ぞ歸らざる)『詩經』国風 邶風

「道行(みちゆき)」

AKY訳

(原詩)

(読み下し文)

ああ！

しなければ……しなければ……

あなたに会ったりしなければ……

なんで家にも帰れない

なんで夜露に濡れながら

寒さに震えて居にやならぬ

ああ！

なかつたら……なかつたら……

あなたと一緒にでなかつたら……

なんで故郷(くに)にも帰れない

なんで路傍(みちばた)身を寄せて

泥にまみれて寝にやならぬ

式微式微

微(び)なり微(び)なり

胡不歸

胡(なん)ぞ歸(かへ)らざる

微君之故

君之故微(な)かりせば

胡為乎中露

胡為(なん)すれぞ中露においてせむ

式微式微

微なり微なり

胡不歸

胡ぞ歸らざる

微君之躬

君之躬(み)微かりせば

胡為乎泥中

胡為れぞ泥中においてせむ

「あたし、あなたになんか会わなきゃよかったんだわ。あなたにあつたりしなれば、そうして、あなたといっしょにきたりしなれば。きつと今ごろは、暖かいお布団の中で寝ていられたのよ。ねえ、どうしておうちに帰れないの。なんで、こうして泊まるどころもなく、夜露に濡れながら、濡れた泥んこのところで野宿しなくちゃならないのよ……。帰りたい……。おうちが恋しい……。」

一時の恋に迷って、男と駆け落ちしたものの、乏しい持ち合わせも尽きてしまった。苦しい逃避行に耐えかねて、つい泣き言のひとつも出てきます。

歌舞伎にでも出てきそうな道行の場面、こういう芝居は、やっぱり福助だろうなあ。こんなときの福助は、芝居もいいけど、声がね。歌舞伎手帖(二〇〇八年版)を見てたら、「美声」って書いてあったけど、美声っていうのは、ちよつと違うのよね。なんていうか色っぽいです。好きなんだよなあ、あの声。あの声でこんなせりふを言われたんじゃあ、もう、たまりませんね。ぞくぞくします。

「使われている言葉について」

- 式、発語のことば、「ああ」、「それ」、など。
- 微、……でなかったならば、……しなかったならば。
- 胡、なんで、どうして。
- 乎、疑問の助辞
- 中露、露中。野ざらし。
- 泥中、どろまみれ

この詩にもいろいろな解釈があるようです。わたしは、駆け落ちした女の人の嘆きをイメージして詩にしましたが、帰ってこない夫を待ちわびる詩、あるいは、亡命している君主に帰国を勧める臣下の詠んだ政治的な詩と考える方もいます。

待ちわびている妻や、亡命しているとはいえ、一国の君主だったものが、何で露にぬれたり、泥の中にいるのか、わたしには、よくわかりません。

政治的な詩とする考え方では、「中露」や「泥中」を比喩的な表現として考えることもできるかもしれません。しかし、それでは、主題が普遍性にかけて、民謡として広く支持され、永く伝わるには、弱いように思えます。

「詩経の解釈について」

昔から、詩経の解釈にはいろいろあるようです。同じ詩が、政治的な詩とされたり、恋愛詩とされたり、あるいは亡き人を悼む詩とされたり、まったく違った解釈がされています。

吉川幸次郎さんは、学人の翻訳、文士の翻訳の区別をされたといわれますが、専門家が学説として主張する際には、はっきりした根拠資料を伴っていることが必要だと思います。

しかし、中国文学や漢字学の専門家の書かれた訳や解説書を読んでも、例えば「恋愛詩である。政治詩と考えるべきでない。」などと、明確に主張されているにもかかわらず、その根拠になると、全く記載されていないか、せいぜい、「詩序でそういっている」とかいうような、いわば伝聞記事だけで、著者自身が、何故、そう考えたのか、どうしてそう考えることができるのか、はっきりとした根拠を挙げて、きちんと説明しているようなものは、私の見た限りありません。いいかえると、吉川さんのいう学人の翻訳というものはなくて、ほとんどが文士の翻訳なのだといっていると思います。

A-056 「考槃」(槃しみを考して澗に在り) 『詩経』国風 衛

「い」ことしたの

AKY訳

(原詩)

(読み下し文)

谷のほとりで「い」ことしたの

考槃在澗

槃(たのしみ)を考(な)して澗(かん)に在り

あの人つたらやさしくって…

碩人之寛

碩人(せきじん)之(こ)れ寛(かん)たり

独り寝の夢覚めて眩くあのとまの「と

獨寐寤言

獨り寐(い)ね寤(さ)めて言う

い「もごも」想っているわ

永矢弗諼

永く矢(ち)かつて諼(わす)れず

山のふもとで「い」ことしたの

考槃在阿

槃を考して阿(あ)に在り

あの人つたらくつろいじやって…

碩人之邁

碩人之れ邁(ひ)なり

独り寝の夢覚めて歌うあのとまの「と

獨寐寤歌

獨り寐(い)ね寤(さ)めて歌う

いつまでも「忘れないわ」

永矢弗過

永く矢(ち)つて過ぎず

丘にのぼって「い」ことしたの

考槃在陸

槃を考して陸(おか)に在り

あの人のみわりで私踊ったりして…

碩人之軸

碩人之れ軸(じく)たり

独り寝の夢覚めて思うあのとまの「と

獨寐寤宿

獨り寐(い)ね寤(さ)めて宿る

「誰にもいわない」けっして…

永矢弗告

永く矢(ち)つて告げず

「このあいだ、わたし、あの人といいことしちやつたんだ……」

谷のほとりや山のみもとで。あの人つたら、とつてもやさしくつてさ。ちよつとしどけないかつこうもしたりして。

だから、二人とも盛り上がつちやつて。楽しかつたなあ。わたし、はしやいじやつて、あの人の周りを踊りまわつたりして。

だから、毎朝目が覚めてからずつと、あのときのこと思っているんだ……

でもね。他の人には言わないの。だって、言つたら、あの人とのこと、だめになつちやうような気がするんだもん。」

「使われている言葉について」

● **考槃** 考は、成す。槃は、楽しみ。考槃については、白川静さんが逢引のこと、藤堂明保さんが、遊びまわることだといっているほか、考凡(降神の儀礼)とする説があり、槃には、楽器をたたいて楽しむ、隠居の楽しみ、木を組み立てて家を作ることなどとする考え方もある。わたしは、逢引説によつて若い女のその日の思い出のように解して訳した。

● **澗**、谷あい。谷川。

● **碩人**、優れた人。立派な徳のある人、大きい人。

● **寛**、広い。ゆつたりした。可愛がる。

● **寐**、寝る。

● **寤**、覚める。

● **矢**、誓う

● **諼**、いつわる、忘れる、勿忘草

● **阿**、山の曲がりめ、山あいのすそ。

● **邁**、ゆるやか。寛大。白川静さんは、いくらかしどけない意味を含ませている

のだらうといっている。

● **過**、過ぎたこととして忘れる。

● **陸**、小高い土地、おか。

● **軸**、車の軸、丸いものを中心、白川静さんはめぐるといふほどの意味だらうという。加納喜光さんは、するりと抜け

出した様子だという。

● **宿**、多くの人は目が覚めてもなお臥していることとつているが、第一章、第二章

と比べ不自然。加納喜光さんは、思い

がとどまつて離れないと解している。

● **告**、白川静さんは、鞠の仮借で、終わ

らない、極まりないの意だといっている。

● 多くの方は、「告げない」と文字通りに

解している。

この詩については、賢者が隠遁生活しているのに、それをうけない君主を批判する詩であるとか、隠居生活を楽しむ詩であるとか、男女の逢瀬を題材にしたものだとするものとか、いろいろな説があるようです。

いろいろ文献を読んでみましたが、かなり断定的に書いては、あるものの、その根拠を明確に記述してくれているものがなく、わたしには、どれが正しいのかは、わかりません。

ただ、原詩を素直に読んだかぎりでは、君主を批判しているようなところは、表には出ていないように思います。

また、自分が隠遁生活を楽しんでいる様子を詠んだ物とすると、自分で自分を碩人(大きな人、立派な人)つていうだらうか。もし、周りの人がその人を見て言うのなら、「永く誓つて……」つていうのもおかしい。

で、結局、ここに載せたような情景、女の子が、恋人とあつたときのことを思い出している様子をうたつたものというのが、もつとも、ぴつたりするように思えたので、そのようなイメージで訳してみました。

A-096「鶏鳴」(鶏既に鳴けり)『詩経』国風 齊

「鶏鳴いたわよ」

AKY訳

さつき鶏鳴いてたわ
ねえ、もう、お勤めにいかなきやね

「鶏鳴いたわけじゃない
蠅の羽音がするだけさ」

お空が明るくなったわよ
ねえ、いそいそでお勤め行かなきやね

「おひさまのぼったわけじゃない
月が明るく照るだけさ」

蟲がぶんぶん飛んでいる
お昼よ、お勤め終いだわ

ねえ、あなた
夕べはとつてもよかったわ
でもきつとみんなが噂してるわよ

(原詩)

(読み下し文)

鶏既鳴矣
朝既盈矣

鶏既に鳴けり
朝(ちよう)既に盈(みち)る

匪鶏即鳴
蒼蠅之聲

鶏則ち鳴くにあらず
蒼蠅(さば)えの聲なり

東方明矣
朝既昌矣

東方明けたり
朝既に昌(しょう)たり

匪東方即明
月出之光

東方則ち明けるにあらず
月の出の光なり

蟲飛薨薨

蟲(むし)飛んで薨(こう)々(こう)

甘與子同夢

甘(たの)しみて
子(そなた)と夢を同じくすれども

會且歸矣

會(つとめ)は且(は)や歸(おわ)らん

無庶予子憎

庶(もろび)との予(われ)と子(そなた)に
憎(しみ)無(から)んことを

「ねえ、あなた、もう朝よ。早く起きてお勤めに行かなきゃ。」

「うーん。まだ、早いよ。もう少し寝かせてよ。」

新婚早々の若い二人、奥さんは、ご主人を勤めに行かせようとせかしているけれど、ご主人のほうは、昨晚のお疲れがまだ抜けません。ぐずぐず言っています。女のほうも口では世間のことを言ってはみたものの、本当は、やはり、離れたくない、一緒にいたいのです。新婚早々の若い男女の気持ちが伝わってくるような詩です。

「詩経」(Shi Jing)は、中国最古の詩篇です。古くは単に「詩」と呼ばれていました。もともと舞踊や楽曲を伴う歌謡であったと言われ、各地の民謡を集めた「風(ふう)」、貴族や朝廷の公事・宴席などで奏した音楽の歌詞である「雅(が)」、朝廷の祭祀に用いた廟歌の歌詞である「頌(しよう)」に大別されますが、このうち「風」は、周・召・邶・鄘・衛・王・鄭・齊・魏・唐・秦・陳・檜・曹・豳の十五の国と地域の小唄や民謡を収め、「国風」とも呼ばれていて、庶民の生活や、男女のことを主題にした素朴でおおらかなものが多いようです。

周と召は、下に南をつけ、「周南」、「召南」、他は、「鄭風」、「齊風」のように風をつけて分類されています。

この詩は、「齊」のもの。齊は、「太公望」呂尚の封じられた国で、現在の山東省付近にありました。

この詩は、「朝」をアサと読むか、「チヨウ」と読んで、朝廷、官吏の勤めと解するかで、詩の意味が変わってきます。通常の解釈では、朝と解して、この詩は、夫婦の朝の風景を詠んだものとされていますが、松枝茂夫さん、白川静さんは、會を男女の構會であるとして、逢瀬の後、きぬぎぬの別れを惜しむ歌と解しておられます(松枝茂夫「中国名詩選上」岩波文庫、白川静「詩経 国風」東洋文庫)。「アサ」説では、女が男に「もう朝になつたから、帰って。」といっているのであり、「お勤め」説では、「もう、お勤めに行く時間よ」といっていることとなります。

インターネットには、中国の古典を集めたサイトがあり、ここに、この英訳が乗っていました(下参照)。朝を, court, とまた、「會且歸矣」は、the assembled officers will be going home, と訳して、通常の解釈に拠っています。わたしも、こちらを採用しました。

また、最後の「無庶予子憎」もわかりにくいところ。どれが主語なのか。「庶(ひと)びとが予(わたし)の子(あなた)を憎むことが無いように」橋本循さんと読んだり、白川静さんのように子の字は間違つて入ったといつて「庶(ねがわ)くは、予(わたし)を憎むこと無からん」と読んだりしていますが、どれも無理があるように思います。わたしは、左の英語訳にしたがつて、「庶(ひと)びと」が、予(わたし)と子(あなた)を憎んでいるのではないかしら」と心配しているものと解釈しました。

"Ji Ming"
The cock has crowed;
The court is full.
But it was not the cock that was crowing;
It was the sound of the blue flies.
The east is bright;
The court is crowded.
But it was not the east that was bright;
It was the light of the moon coming forth.
The insects are flying in buzzing crowds;
It would be sweet to lie by you and dream.
But the assembled officers will be going home;
Let them not hate both me and you.

(中國哲學書電子化計劃)

A-124「葛生」(葛生いて楚に蒙むり) 『詩経』国風 唐

「葛くず」茂り」

A・K・Y 訳

葛茂り 楚(いはら)を蒙(おおう)
 かがみ草 野原にはびこる
 あなたはもう ここには亡(いな)い
 わたしはひとり
 誰と一緒に 生きてらいいの

葛茂り 棘(いはら)を蒙(おおう)
 かがみ草 墓地にはびこる

あなたはもう ここには亡(いな)い
 わたしはひとり

誰と一緒に 息(やす)んだらいいの

粲(かがやく)角(つ)の枕(まくら)して

爛(きらめ)く錦(にしん)その身を幕(おおう)でも

あなたはもう ここには亡(いな)い
 わたしはひとり

誰と一緒に 目覚めたらいいの

夏のながい日 冬(ふゆ)ながい夜

いつかきつと あなたのもとへ

冬(ふゆ)ながい夜 夏のながい日

いつかきつと あなたのそばに

(原詩)

葛生蒙楚
 薺蔓于野
 予美亡此
 誰與獨處

葛生蒙棘
 薺蔓于域
 予美亡此
 誰與獨息

角枕粲兮
 錦衾爛兮
 予美亡此
 誰與獨旦

夏之日
 冬之夜
 百歲之後
 歸於其居

冬之夜
 夏之日
 百歲之後
 歸於其室

(読み下し文)

葛は生(お)いて楚(そ)に蒙(こう)むり
 薺(れん)は野(や)に蔓(は)びこれり
 予(わ)が美(み)此(こ)に亡(な)し
 誰(た)とともにか獨(ひとり)り處(ところ)らん

葛は生(お)いて棘(きよく)に蒙(こう)むり
 薺(れん)は域(いき)に蔓(は)れり
 予(わ)が美(み)此(こ)に亡(な)し
 誰(た)とともにか獨(ひとり)り息(やす)まん

角枕(かくちん)粲(さん)たり
 錦衾(きんきん)爛(らん)たり
 予(わ)が美(み)此(こ)に亡(な)し
 誰(た)とともにか獨(ひとり)り旦(あ)かさん

夏(なつ)の日
 冬(ふゆ)の夜
 百(ひゃく)歳(さい)の(の)ち
 其(その)の居(い)きよに歸(かえ)りせん

冬(ふゆ)の夜
 夏(なつ)の日
 百(ひゃく)歳(さい)の(の)ち
 其(その)の室(むろ)しつに歸(かえ)りせん

「あの葛さえも茨という相手がいて、しっかり寄り添うように絡み合いながら伸びている。しかし、かがみ草は、野原やあの人の眠る墓地に乱れ茂って私との間をさえぎっているかのようだ。わたしは、独りになってしまった。これから誰と生きていったらいいのか。これからの長く暑い夏の日、長く冷たい冬の夜を一人ですごさなければならぬ。けれども、いつか自分の命の終わるときには、あの人の眠るこの場所に、必ず私も一緒に眠るのだ。それをはげみに、これからの長い年月を生きていこう。」

亡き配偶者を偲ぶ、『詩経』の中でも、最も美しい情感に溢れた詩のひとつだと思います。

私たちの歳になると、いつこの詩が現実のものになるか、心に迫るものがあります。いつかは、夫婦のどちらかがこの思いを味わうことになるのでしょうか。でも、そうなたたとしても、私たちにも、このことだけは、わかっています。

「いつかきつと貴方のもとへ」
「いつかきつと貴女のそばに」

「使われている言葉について」

- 葛(くず)、日本名クズ、マメ科。日本語別名、クズカズラ、マクズ、ウラミグサ(裏見草)。
- 楚(そ)、日本名タイワンニンジンボク、クマツラ科。漢名黄荆(コウケイ)、楚は別名。荊棘ともいい、イバラのこと。
- 蔽(れん)、日本名カガミグサ、ブドウ科のつる草。(注)参照。
- 棘(きょく)、いばら。韻のために、楚と言いついて換えている。
- 域(いき)、塋域(墓域)。
- 角枕(かくちん)、角の飾りのついた枕。
- 錦衾(きんきん)、棺を覆う錦のおおい。
- 百歳之後、死んだ後。
- 居、室、墓室、韻のために言い換えたものの。

(注)
蔽この訳では、鏡草と訳している。嶋田英誠さん編の「跡見群芳譜」によると、ブドウ科のつる草で、別名をビヤクレンともいうという。「跡見群芳譜」には、写真も載っている。そこで、そちらをご覧になるといいと思う。べつに「五葉かつら」、「ピンボウカツラ」と解する方もいる。鏡草のほうが、音の感じがいいので、こちらを使った。

もつとも、「蔽蔓」とは、乱雑なさまをいうのであつて、「かがみ草が野にはびこる」と読むのは、誤りだという説もある。この説によれば、はびこっているのは、かがみ草ではなく、第一句と同じ葛ということになるが、それだと、葛が乱雑に茂っているという様をあらわすだけになる。一方、葛が他の植物に巻きつくのを、男女が寄り添う様を表すのだということという人もあるので、その場合、葛が、茨にまとわりつくだけでなく、野原や墓地にはびこってしまったのでは、意味がとおらなくなる。わたしは、葛が茨に寄り添っている一方で、鏡草が、墓地を覆って、地下に眠るよき人と自分とを隔てていると解して訳した。

A-143「月出」(月出でて皎たり) 『詩経』国風 陳

「月のひかり」

AKY訳

月は白く澄みわたり

みめ美よき人の舞ふかげは

たゆたふごとくゆるやかに

うらぶる想ひ眼(まな)離(かれ)えず

月はきよく澄みわたり

しな美よき人の舞ふかげは

うれふるごとくゆるやかに

みだるる思ひ眼(まな)離(かれ)えず

月は照りて澄みわたり

しよさ美よき人の舞ふかげは

しなぶがごとくゆるやかに

さざめく想ひ眼(まな)離(かれ)えず

(読下し)

ゲツシニツコウケイ
月出 皎兮
コウジンリヨウケイ
佼人 僚兮

月出でて皎たり

ジヨウキウケイ
舒窈 糾兮

佼人僚たり

ロウシンシヨウケイ
勞心 悄兮

舒にして窈糾たり

ゲツシニツコウケイ
月出 皓兮

勞心悄たり

コウジンリヨウケイ
佼人 憫兮

月出でて皓たり

ジヨウジユケイ
舒優 受兮

佼人憫たり

ロウシンシヨウケイ
勞心 慍兮

舒にして優受たり

ゲツシニツコウケイ
月出 照兮

勞心慍たり

コウジンリヨウケイ
佼人 燎兮

月出でて照たり

ジヨウシヨウケイ
舒夭 紹兮

佼人燎たり

ロウシンサンケイ
勞心 慘兮

舒にして夭紹たり

勞心慘たり

「明るく月が照る庭。月光に誘われたように若い女が舞っている。まるで影が揺れているようにゆったりと。ときおり、月の光に美しい顔が浮かび上がるように見える。わたしの心は、吸いつけられたように目を離すことができないでいる。彼女への想いが、わたしの胸をしめつけるようだ。」

まるで舞台のような美しい光景です。藍色の背景、ただ一つ白い月が描かれています。若い娘が月の光を浴びながら舞っています。ゆつくりと漂っているかのように。こういう舞台での踊りは、玉三郎が極め付けです。玉三郎の魅力は、ポーズの美しさです。動きの中で一瞬止まったときの姿の美しさ。いつだったか、「驚娘」で雪の降りしきる中、白無垢でイナバウワのように身をそらした場面の美しさは、息を呑むような思いがしました。ここで踊るのは、やはり玉三郎でしょう。いや、待つて。春猿もいいかな。国立劇場歌舞伎俳優研修出身の猿之助一門ですが、最近では、大きな役もこなしています。これからの旬の役者です。姿がいいし、声もいい。気になっている役者さんのひとりです(歌舞伎の世界は、門閥以外でも、いい役者が大勢育っています。御曹司たちも刺激されたか、やる気がみえ、これから楽しみです)。

詩として訳すほかに、音読みするということも漢詩を楽しむ方法のひとつではないかかと思えます。もちろん、中国語で読むのでなければ、本当のよさはわからないともいえませんが、現代の中国語は、唐の時代以降はともかく、詩経の時代のものとは、大きく異なり、日本でおこなわれている音(おん)のほうが古い時代のものを伝えているとも聞いたことがあります。もともと、周の時代以前の発音など、正確なところは、誰もわからないわけだし、気軽に、音読みで音読するのも楽しいと思えます。

そんなことから、もとの詩に音読みのルビをふつてみました。お経みたいだけれど、いちど声を出して、読んでみて下さい。

わたしなら、テンポは、ゆつたりと、歩く速さ(アンダンテ)で、うたうように(カンタービレ)。各句の最期の「兮(けい)」は、詩の調子を整えるためのもので、「ヘイ」とか、「ヨイショ」といったような意味のことばだけれど、この詩の場合は、むしろないほうがいくらい、休止符だと思つたほうがいい。アウフタクトで次の句の頭につけるような感じで、ごく軽く、息を吸うようにしながら読む。その方が感じが出ると思えます。

「使われている言葉について」

- 皎(こう)、月の光の白く光るさま。
- 佼人(こうじん)、佼は、姣、しなやかな美しさ。美人、
- 僚、姿のよいさま、容貌が美しい。(毛伝「好き貌」)
- 舒、ゆるやか、しずか、おもむろ。ゆつくりと。
- 窈窕、窈は、窈窕、しとやか。糾は、身をくねらせる形、静かに舞う姿をいう。しなしなど、しとやかに。
- 勞心、心遣い。心がとられる。
- 悄、心がしおれる。憂い。
- 皓(こう)、白くひかるさま。
- 嫵(りゅう)、姿のよいさま。妖。あだつばい
- 悽受、しずか、ゆるやか。
- 慍、心の落ち着かぬさま。
- 照、照り光る。
- 療、明るい、すつきりしている。
- 天紹、しなやかに身をくねらせるさま。
- 慘、惨は、意味が通りにくい。朱子以来、「慄」の誤りであるとされている。(慄は、心せわしく、疲れる、憂えるの意。)

A-150「蜉蝣」(蜉蝣の羽 衣裳楚楚たり)『詩経』国風 曹

「蜉蝣(かげろう)」

AKY訳

薄絹きよらか 蜉蝣(かげろう)の羽(はね)
名残りの衣裳つきせぬ憂い

逝(ゆ)かれるものなら あなたのそばへ

薄絹あざやか 蜉蝣の翼(はね)

形見の装束あふれる嘆き

息(やす)めるものなら あなたのそばで

蜉蝣は蛻(も)ぬいで 地下(じげ)より還る

帷子(かたびら)の白も 叶(な)ぬ願(ねが)い

眠(ね)れるものなら あなたのそばに

(原詩)

蜉蝣之羽

衣裳楚楚

心之憂矣

於我歸處

蜉蝣之翼

采采衣服

心之憂矣

於我歸息

蜉蝣掘閱

麻衣如雪

心之憂矣

於我歸說

(読下し文)

蜉蝣(ふゆう)の羽

衣裳楚楚たり

心之憂(うれ)うる

於(こ)に我 歸處(きしよ)せん

蜉蝣(ふゆう)之翼

采采たる衣服

心之憂(うれ)うる

於(こ)に我 歸息(きそく)せん

蜉蝣(ふゆう) 掘閱(くつせつ)

麻衣(まい)雪の如し

心之憂(うれ)うる

於(こ)に我 歸說(きせい)せん

「貴方を偲んで、部屋に貴方の着物を掛けています。清らかで美しく、まるで蜉蝣の羽のよう。でも、あなたは、その蜉蝣のようにはかなく、逝つてしまつた。私の憂いはつきることなく、嘆きが溢れてきます。」

蜉蝣には、土の中で殻を脱ぎ捨てて蘇つてくるといふ伝説があります。棺の中の貴方は、白い帷子を着て、まるでその蜉蝣が蛻(もぬ)いだときのようなけれど、蜉蝣とは違つて、甦つてきて欲しいという私の願いは、叶いそうもありません。

できることなら、わたしも貴方と一緒にお墓の中で貴方のそばで眠りたいと願うばかりです。」

蜉蝣のように、美しく、けれどはかなかつた故人。残されたものの嘆き。美しい言葉でつづられ、A-1-2-4として掲載した唐風の「葛生」にも負けないくらい美しい詩に仕上がっています。

「使われている言葉について」

● 蜉蝣、かげろう。朝うまれて夕には、命終わるといわれ、はかないことの象徴とされる。一方、中国では、地中で脱皮し、地上に這い出ることから、再生を願う意味もある。

● 楚楚、清楚楚。さわやか。

● 采采、いろどりの鮮やかな。

● 於我、藤堂明保さん監修の「詩経」(中国の古典一八、平凡社)で、加納喜光さんは、「我において」と訳している。他でもその例が多いようだ。そうすると、「歸處」は、「帰りおれ」となつて相手はまだ生きている。於には、「ここ」の意もあり、白川静さんはそのように訳しておられる。そうすると、「於我歸處」は、「ここに我は歸處せん」で、歸處するのは自分だ。相手の人はおそらく亡くなつていて、蜉蝣の羽根は、その人の形見の着物だろう。私もその方が、蜉蝣のはかなさが生きてくるように思う。

● 歸處、歸は、落ち着く、べきところに行く。帰る。嫁ぐの意味にも使われる(桃夭)。處は、安らかに落ち着く。腰を落ち着ける野意。白川静さんはこの詩における、この歸處、第二章の歸息、第三章の歸説が、唐風の「葛生」での處、息、旦に対応していると指摘し、両方とも亡き人を悼む詩であるとしている。

● 歸息、息は、やすむ。休息する。

● 歸説、説は、宿る。

● 掘闕、穴、穴を掘る、殻を脱ぎかえる。

● 蜉蝣が地中で殻を脱ぎかえることから、再生を希う。

● 麻衣如雪、白い麻ぎぬ、麻衣は、死者の着ける帷子。

この詩は、滅びようとする国の人々が、蜉蝣のように美しい衣装に現を抜かすことに対する警鐘の詩であるとか、薄幸の女性に対する憐憫の詩であるなどの解釈もあるけれど、それでは、「掘闕麻衣如雪」の個所の訳が不自然になります。わたしは、白川静さんの「悼亡の詩」説をとりたいと思います。